

授業科目名	授業担当者(担当)氏名	区分	単位	年間授業時間	受講学年	開講年次
楽曲研究基礎	池原 舞	選択	1	15時間	1/2	毎年

《授業の概要》

このクラスは、修士論文を完成させるまでの伴走の役目を果たす。修士論文による審査で修了審査を受ける者は、2年通しての履修が必要である。また、修士演奏による審査を受ける予定の者や、どちらを選択するか未定の者でも受講可能である。修士演奏の他に課される曲目解説執筆や、リサイタル時のプログラムの曲目解説執筆を円滑に進めるためにも、本クラスの受講は有効となるだろう。履修1年目は合同での講義、履修2年目は個別指導とする。履修2年目については、100分の指導を8回実施するものとして大まかな流れを記してあるが、個々の進捗に合わせて、日程および1回分の指導時間の調整を行う。

《到達目標》

履修1年目：音楽を言語で表現する意義を実感し、音楽研究とはどのようなものか、自らの言葉で語るができるようになる。次年度に向けたおおまかな研究計画を立てる。  
履修2年目：研究計画に沿って研究を遂行し、修士論文を完成させる。

《授業計画》

【履修1年目】

第1回 [4/17(月) 16:00~17:40]

授業：音楽における言語表現

いくつかの音源についてディスカッションを行いながら、音楽を言語で表現することの意義を確認し、言語表現の広がりを感じ取る。

事前：岡田暁生『音楽の聴き方：聴く型と趣味を語る言葉』（東京：中央公論新社、2009）を通読する。

事後：楽曲解説、演奏評、音楽書評の3種それぞれにつき、自身の琴線に触れる記事を各1本ずつ入手する（書き手の名前がわかるもの）。

第2回 [5/8(月) 16:00~17:40]

授業：楽譜と演奏

ニコラス・クックの論文「ストラヴィンスキーが指揮するストラヴィンスキー」に基づき、楽譜の役割、および作曲家と演奏家の関係性について考察する。

事前：東京芸術大学音楽学部『新しい世紀の音楽論：境界と領域を超えて』より、ニコラス・クック著の「ストラヴィンスキーが指揮するストラヴィンスキー」(p.96-120)を精読する。

事後：楽譜には何が書かれていて、何が書かれていないのか、これまでの演奏実践を通じて考察し、要点をまとめる。

第3回 [6/12(月) 16:00~17:40]

授業：作者の「意図」

ピーター・キヴィの「意図としてのオーセンティシティ」を解題し、HIP(Historically informed performance)について議論する。

事前：ジョゼフ・カーマン、リチャード・タラスキン、ジャン＝ジャック・ナティエほか著、福中冬子訳・解説の『ニュー・ミュージコロジー：音楽作品を「読む」批評理論』（東京：慶應義塾大学出版、2013）より、「はじめに」(p.iii-xiv)、およびピーター・キヴィの「意図としてのオーセンティシティ」(p.131-174)を精読する。

事後：講義内でのディスカッションに基づき、自身の体験を交えて、感じたことおよび考えたことを1000字程度でまとめる。

第4回 [7/3(月) 14:00~15:40]

授業：「作者の死」

ロラン・バルトの「作者の死」の概念を解題し、音楽をめぐる状況下でこの問題を捉え直す。

事前：ロラン・バルト著、花輪光訳の『物語の構造分析』（東京：みすず書房、1979）より「作者の死」(p.79-89)および「作品からテキストへ」(p.91-105)を精読する。

事後：講義で理解が困難だった部分について、関連文献を講読する。

第5回	[9/11(月)16:00~17:40] <b>授業:</b> 研究の意義、論文執筆の意義 なぜ研究するのか、そしてそれをなぜ論文にまとめるのかを今一度確認する。また、論文を書く上で、音楽分野に特化した難しさについても理解する。 <b>事前:</b> 酒井聡樹『これから論文を書く若者のために(究極の大改訂版)』(東京:共立出版株式会社、2015)を読む。 <b>事後:</b> 研究として取り組んでみたい課題を複数見つけ、それぞれ簡単に構想をまとめる。
第6回	[10/2(月)16:00~17:40] <b>授業:</b> 研究領域、方法論 音楽研究が広がりをもったものであることを認識し、研究内容に即した研究手法があることを理解する。 <b>事前:</b> 沼野雄司『音楽学への招待』(東京:春秋社、2022)を読み、うち1本について要点をまとめ、15分程度でプレゼンテーションができるように準備する(履修者が複数人の場合は、章を分担)。 <b>事後:</b> 研究として取り組んでみたい課題に適した研究手法を考え、その研究手法を用いている論文(研究対象は問わない)を最低3本入手する。
第7回	[11/13(月)16:00~17:40] <b>授業:</b> 論理的思考 論理展開の方法を学ぶとともに、野矢茂樹『論理トレーニング101題』(東京:産業国書、2001)を用いて実践的に課題を解きながら、論理的な文章を書くための要点を習得する。 <b>事前:</b> 取り組んでみたい課題を絞り込み、先行研究を調べ、リチャード・J. ウィンジェル、宮澤淳一、小倉真理訳『改訂新版 音楽の文章術:論文・レポートの執筆から文献表記法まで』(東京:春秋社、2014)を参照して、参考文献表を作成する。 <b>事後:</b> 作成した文献表から任意の一論文を精読する。
第8回	[12/4(月)16:00~17:40] <b>授業:</b> 先行研究紹介 履修者による先行研究紹介および質疑応答。 <b>事前:</b> 任意の一論文について、15分程度で内容紹介のプレゼンテーションができるように準備する。 <b>事後:</b> 修士論文で扱いたい課題を絞り込み、研究計画を立てる。 ※なお、授業計画は、履修者の人数や理解度に応じて、変更を加える可能性がある。

#### 【履修2年目】

第1回	<b>授業:</b> 個別指導①:研究課題、研究計画の確認。 <b>事前:</b> 研究課題および研究計画、現時点での研究の進捗をまとめる。 <b>事後:</b> 指導を参考に、仮目次を作成する。
第2回	<b>授業:</b> 個別指導②:研究進捗(方法論等)の確認。 <b>事前:</b> 研究の進捗をまとめる。 <b>事後:</b> 指導を参考に、研究の見直し、さらなる研究の遂行。
第3回	<b>授業:</b> 個別指導③:研究進捗(分析の精度等)の確認。 <b>事前:</b> 研究の進捗をまとめる。 <b>事後:</b> 指導を参考に、研究の見直し、さらなる研究の遂行。
第4回	<b>授業:</b> 個別指導④:修士論文進捗(序盤)の確認。 <b>事前:</b> 修士論文の執筆に着手。 <b>事後:</b> 指導を参考に、修士論文の改訂。
第5回	<b>授業:</b> 個別指導⑤:修士論文進捗(中盤)の確認。 <b>事前:</b> 修士論文の執筆。 <b>事後:</b> 指導を参考に、修士論文の改訂。
第6回	<b>授業:</b> 個別指導⑥:修士論文進捗(終盤)の確認。 <b>事前:</b> 修士論文の執筆。

事後:	指導を参考に、修士論文の改訂。
第7回	
授業:	個別指導⑦: 修士論文全体の確認。
事前:	修士論文の完成。
事後:	修士論文の修正、提出。
第8回	
授業:	個別指導⑧: 修士論文面接の準備。
事前:	修士論文面接で問われそうな質問と返答リストの作成。
事後:	修士論文面接の模擬練習。

《履修資格／履修に必要な予備知識や技能》  
 1・2年次生  
 修士論文による審査で修了審査を受ける者は、2年通しての履修が必須。

《授業の形式》  
 授業、レッスン

《成績評価の要点》  
 履修1年目:  
 試験:0% 提出課題・作品発表等(提出された事後学習の完成度):50% 受講姿勢(事前学習における理解度および講義内でのディスカッションにおける貢献度):50%  
 成績評価は、上記の項目についてそれぞれの配分で総合的に判断し「合格」又は「不合格」で評価する。  
 なお、事後学習の提出期限は別途講義内で指示する。  
 履修2年目:  
 成績評価は、修士論文面接(審査)によって「優」「良」「可」「不可」で評価する。

《課題(試験・レポート等)に対するフィードバック方法》  
 履修1年目の事後学習についてのフィードバックは、次の回の冒頭で一括して行う。  
 履修2年目については、個別指導そのものが毎回のフィードバックとなる。

《事前・事後学習、必要時間》  
 履修1年目は、目安として、各回につき、事前学習には120分以上、事後学習には60分以上を必要とするであろう。履修2年目は、履修者の知識や扱う課題によって異なるが、修士論文を完成させるには、コンスタントに週12時間程度の研究時間を要すると思われる。

《教材》  
 履修1年目初回の事前学習のための文献(岡田暁生『音楽の聴き方:聴く型と趣味を語る言葉』(東京:中央公論新社、2009))は事前に入手必須とする。第2回以降に必要な文献については、初回講義にて通達する。  
 履修2年目に必要な文献は、図書館を活用するなどして、個人で手配されたい。相談があれば随時受け付ける。

《授業時間以外で、この授業内容等について質問がある場合》  
 オフィス・アワーを活用していただきたい。それ以外は、メールにて受け付ける。